

浅間山の過去の火山活動

小～中規模噴火



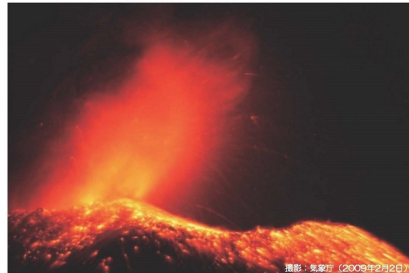
2004年の噴火

浅間山は、最近20～30年間は比較的静かな状態が続いています。しかし、明治時代から昭和30年代にかけては、小～中規模の噴火をひんぱんに起こしていました。この時期の噴火では、降灰や噴石、空振、ときには小規模な火砕流などの現象が発生しました。

これらの噴火で亡くなった方は、すべて火口から4キロメートル程度以内の範囲で、大きな噴石の直撃を受けた登山者でした。

小～中規模噴火時の注意点

小～中規模の噴火は、今後も起こりやすいと予想されま
す。噴火した場合、火口から4km以内では、大きな噴石が
飛んでくる可能性があります。噴火時は危険ですので火口
から4キロメートル以内に近づいてはいけません。噴火し
ていないときでも、指定された登山道以外は立ち入り禁止
です。



2009年の噴火

大規模噴火

大規模な噴火は、過去2000年間に3回起こっています。明治以降、浅間山で大規模噴火の発生はありませんが、将来起こる可能性はあります。

天仁噴火 1108 (天仁元) 年

天仁噴火は平安時代に発生した大噴火で、天明噴火ほどの記録は残っていません。追分火砕流、上舞台溶岩が流下し、火山噴出物の量は天明噴火の2倍以上であったと考えられています。



1783 (天明3) 年の噴火絵図 (浅間山夜分大焼之図)



天明噴火時に高温の軽石や火山灰から逃げまどう人々 (浅間山焼昇之記)

天明噴火 1783 (天明3) 年

天明噴火は、噴火したり収まったりを繰り返しながら、次第に活動が大きくなっていきました。7月27日頃から噴火が連続するようになり、8月4日から5日にかけての最も激しい噴火で、大量の軽石や火山灰の降下、吾妻火砕流、鬼押出し溶岩の流下が同時期に発生しました。その後の鎌原火砕流・岩屑なだれでは山麓の集落が大きな被害を受け、下流では泥流によって多くの村が流されました。

○天明・天仁噴火で発生した現象と主な被害

	天明噴火 (1783年)	天仁噴火 (1108年)
発生した現象	<ul style="list-style-type: none"> 降灰 大きな噴石 火砕流 (北麓に流れる) 溶岩流 (北麓に流れる) 土石なだれ 泥流 (吾妻川沿いに流下) 	<ul style="list-style-type: none"> 降灰 大きな噴石 火砕流 (南北に流れる) 溶岩流 (北麓に流れる)
被害	<ul style="list-style-type: none"> 死者：1500名以上 倒壊家屋：2000棟以上 	詳細不明

○天明噴火 (1783年) の推移

(日付は新暦)

天明噴火では、複数の小～中規模噴火に引き続いて大規模噴火が発生しました。ただし、次の大規模噴火もこの通りに推移するとは限りません。

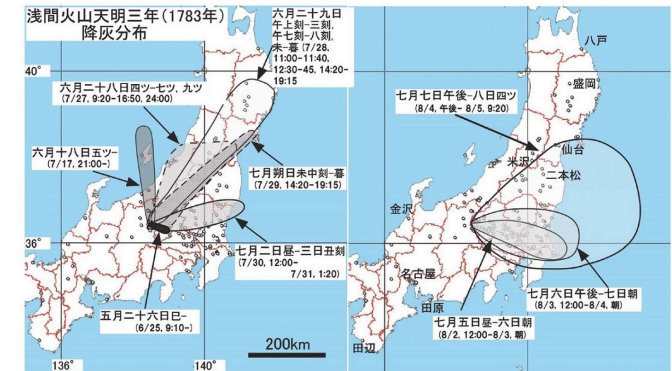
月	5月	6月	7月	8月
日	8-9	25	17	30, 4-5
現象	噴火 (小規模)	噴火 (小規模)	噴火 (小規模)	激しい噴火が始まる
火山活動	火山活動が静穏な時期		火山活動が静穏な時期	
被害				土石なだれ、泥流の発生、火砕流、溶岩流が流れる

大規模な噴火

降下火砕物 (降灰) は、一度の噴火の間でも風向きによってさまざまな方向に降ります。大規模噴火では、軽石も混ざって降ります。



天明噴火で積もった軽石



古文書の記録をもとに、天明噴火の火山灰が積もった範囲を時間ごとに示した図。提供：津久井雅志

もしも大規模噴火が起こったら…

●降灰についての注意点

- ▶ 上空の風に乗って運ばれた火山灰や軽石が、風下側の地上に積もります。
- ▶ 火山灰を吸い込んだコンピューターや精密機器が故障する可能性があります。
- ▶ 木造家屋は屋根に積もった火山灰・軽石の重さで倒壊したり、高熱によって火事になるおそれがあります。
- ▶ 火山灰によって呼吸器障害や目の炎症が起こります。ぜんそくや気管支炎などの症状をお持ちの方は、注意が必要です。
- ▶ 道路が滑りやすくなり、車やバイク、自転車のブレーキが利きにくくなります。また、タイヤで巻き上げられた火山灰などで視界が悪くなります。軽石が厚く積もると自動車の走行は困難です。

○有珠山1977年噴火の降灰被害の例



大規模噴火時の注意点

天明・天仁クラスの大規模噴火が発生した場合、**広域避難の必要があります**。避難経路・避難場所については現在浅間山火山防災協議会で検討を進めています。火砕流や火砕サージの影響を受ける可能性がある範囲では、**事前に安全な場所へ避難する**必要があります。